

故星野日子四郎君の浮世繪研究に就て

(本會研究所員故星野日子四郎君追憶講演)

東京帝國大學教授
文學博士

藤 懸 靜 也

星野君の五十日祭に際して想ひ起されるのは、同君が浮世繪研究に於ても歴史家として特に畫家の傳記方面に細密な調査をせられた事である。元來君は非常に豊富な知識の持主で、我々は常に教へられる所が多かつたが、而も新に一つの事を研究すると成ると、改めて又、材料を豊富に蒐集し初め、自分が満足するまでは決して中止せず、又、筆にも上されなかつた。故に君の浮世繪に關する遺文は意外に少いが、浮世繪畫家の閱歴、或は逸話、殊に又歿年月、親戚關係等についての君の知識は實に驚くほど精細なもので、時には歿年月の一日違ひまでも刻銘に指摘された。是等は我々の到底及ばない點である。それから、君の研究調査の仕方、これが又頗る徹底的なもので、墓所は勿論、過去帳に就いてまで細かく行き届いた實地調査を進め、家系を根掘り葉掘り調べ上げなければ承知されなかつた。これも學者と

しての君の特性の現れであつて、其の熱心は實際人を推服せしめるものがあつた。私は其の一例として君の歌麿研究について申上げる。

私は大正三年から四年の間に、浮世繪版畫史と浮世繪師の閱歷を書いて公けにしたが、其中に歌麿の歿年を文化三年九月二十日と書いてゐる。これは星野君の示教に據つたものである。元來歌麿の歿年は『名人忌辰錄』以來、文化二年五月三日として傳はつてゐるのであるが、之に對して他方では又、歌麿のサインのある畫は文化七八年頃まで在るから、少くとも其の頃には生存してゐたのであらうとの説もある。尤もこれは二代目歌麿の作品を混同したもので、採るに足らぬ謬説ではあるが、ともかく其の様な説もあつた。ところが又明治四十年の十二月に、當時東京帝大の史料編纂係勤務の竹田と云ふ老人が、熱心な墓所通で、今一人五十嵐と云ふ人と共に歌麿の墓を實地に調べて、前記の文化三年九月二十日歿説を『考古界』の第六編九號に發表した。それで歌麿の傳記を書く時私は諸説の可否に惑うて、星野君の説を聽いた。すると星野君は言下に竹田老人の説を賛して、それが正しい事を指摘された。處がさうは答へ乍らも、同君の特性で、自分が現實に突き止めねば承知が出来なかつたと見えて、歌麿の墓所の實地踏査をした。その事は、酒井今古堂で出してゐた雜誌『浮世繪』の第二十七篇（大正六年八月發行）に「歌麿の墓所及び過去帳發見の由來」と云ふ題で、五回に亘つて書かれてある。

それを見ると、星野君は大正四年の七月一日に先づ歌麿の墓の先見者竹田老人と會ひ、翌日は又、浮世繪研究家で自身も版畫を残してゐる橋口五葉と會見して、其の後は橋口氏と共同で歌麿研究をせられたらしいが、九月十二日には、新に又北尾重政の墓を發見して、重政死歿の年から法名までも確められた。そして其の日にも歌麿の墓を訪れてゐる。それから其の次の日曜には、歌麿の師匠鳥山石燕の墓を訪ふ爲、新光明寺に「朝がけを試みた」とあり、更に又歌麿の香華寺たる専光寺に「殺到した」とある。大變な勢ひで行かれた有様が目に見えるやうである。此の寺は淺草區北松山町の九十番地であるが、墓地の方は九十一番地だと云ふやうな細かい事まで書かれてゐる。こゝにも亦星野君の性格が躍如としてゐる。此の時の調査で、星野君は竹田老人の記事に誤がない事を確に是認されたのであるが、同時に文中一二の誤字を親切に指摘してゐる。九月と云ふとまだ暑い時分であるが、其の最中をあの大きな身體で駆け廻つて、歌麿から重政、石燕、或は北尾政美、窪春滿と云ふ風に、それから其れへと研究の手を伸ばされたのである。恐らく此の頃が君の浮世繪研究の最熱烈期であつたらう。

星野君は又、種々の新説を考へ出す人であつた。その一二を言ふと、例へば、あの歌麿が喜多川を名のつた事であるが、それに就て星野君は、喜多川は本來「北川」で、元祿以前には江戸城の北、忍ヶ岡の邊に住んでゐたか、或は吉原の鐵漿溝の附近かにゐて、そんな事から附けた名であらうと云はれた。別

に又、當時浮世繪師としては、「北尾」と「勝川」とが名聲を博してゐたから、二家の姓から各一字宛を取つて附けたのかも知れないとも云はれた。是は何れも臆測であつたが、星野君は自ら辯解して、私が種々の説を出すのは、所見を明らかにすると共に、世の教を受けんが爲であると云はれた。又、歌麿は自分の署名に哥麿の字を多く用ゐてゐるが、星野君は「哥」は俗に「兄貴」と云ふ字である、想ふに歌麿は常に吉原に入浸つてゐたから、そんな點で自ら「兄貴」を標榜したので、歌の略字のツモリで書いたのであるまいと解釋された。或はさうかも知れない。何にしても熱心な研究者であつた。

君は又歌麿の作品に就ても十分な批評をしてゐる。大正七年から九月にかけての『中央美術』に「歌麿の藝術と人物」の題で七回に分つて書いてゐる論文は其の一端である。其中で君は歌麿と石燕・重政との關係を述べ、石燕は狩野系統の畫を學んだ人である、多く美人畫を畫いた歌麿の師匠としては毛色の違ふ方であるが、而も歌麿があのような畫を畫いたのは、北尾重政と鳥居清長の影響である、殊に重政には一層負ふ所が多い、重政は門下を養ふ事に熱心で、後進には各獨創の才を十分伸ばさせる人であつたが、歌麿の師の石燕とは住居も相近く、親友として頻繁に往來したから、自然歌麿も其才能を見込まれて技量を伸ばす機縁を得たのであらうと書いてゐられるが、なほ歌麿と役者畫の事に論及して、寫樂・豊國などとの關係を述べ、大抵の書物には、歌麿は役者畫を描かないと出てゐるが、豊章の名で随分畫

いてゐる。但し名聲を博してからは畫かないので、人がそんな事を言ふのであると記してゐられる。斯う云ふ風に、歌麿については各方面から研究されてゐるが、それ等の關係から、歌麿の建碑計畫なども色々骨を折られたやうである。

二

次には大正八年の六月から九年にかけ四回に亘つて「窪春滿の研讀」が『藝苑』誌上に發表されてゐる。これ亦非常に詳細なもので、俊滿の血統から畫の流風を細かく調べて重政の影響が非常に多いことを説き、其の他國學・俳諧・狂歌に於ける影響まで丹念に考察してある。是等を見ても、星野君が或る一人の浮世繪師の研究にも非常な熱心を籠めて研究された事が分るが、其研究が段々深く成るに随つて、次第に又廣くも成つてゆくから、最初は歌麿一人の研究でも、重政・俊滿・京傳・歙形蕙齋・北尾政美と云ふ風に發展して、遂には凡そ天明全盛期の浮世繪師は悉く其の研究題目に上されると云ふ事に成つた。若し其れ等の研究の全部が書き残されてゐたならば、非常に有益な研究資料と成るのであるが、埋もれた寶を持つたまゝ長逝されたのは遺憾至極である。一體浮世繪研究は材料が頗る多い上に、殊に役者畫などは芝居狂言の上演月からして作品年代の判定も容易に行はれる便利があり、他方又、狂歌集、黄表紙等に揮毫してゐる畫家ならば、其の方面からも調べ上げられる。故に日本人としては勿論、西洋

人でも、これ亦歐米の博物館其の他には浮世繪の藏品が多くある處から、可なり多くの研究者が出てゐるのであるが、只多くの畫を見比べて、表面的な材料だけを取扱つたのでは、到底星野君のやうな深い研究は出来るものでない。星野君のやうな特殊な人が、歴史家としての精緻な頭腦で、深く且つ廣く徹底的に研究して、初めて其の多くの材料が活きて働くのである。此の點、星野君が其の研究を發表するに至らないで溘逝されたのは返す返すも遺憾な事であると私は考へる。

只私としては幸に大正三年以來、此の熱心な浮世繪研究者としての星野君と親交を願うて、星野君の努力研鑽の結果を一々承ることが出来、而も同君一流の綿々として盡きないお話を聽かせて戴いたのであるから、殊に浮世繪研究については、人一倍深い追憶を有するのである。星野君の話と聽かれた人々は、恐らくどなたも御經驗の事と思ふが、同君はいつでも先づ結論を述べて、其れから諄々として其處に到るまでの筋道を話すのが癖で、話し出すと、それから其れへと面白い話が、擴がり進んでゆくのである。尤も時としては脇道へ外れる事もあつたが、脇道の話でも、本筋の話でも、話といふ話が皆、興味津々として而も有益な内容を持つてゐたから、聽いてゐて決して飽きると云ふ事がなく、お蔭で多く教へられる所があつた。私が暫く同君の所へ御無沙汰してゐた間が、恰も浮世繪研究から遠ざかつてゐられた時である事を承つて、浮世繪で結ばれてゐた二人であつた事をしみじみと感ずるのである。